

文芸春秋の3月号を読まれた方も多いと存じますが、新日鐵三村会長が「良い赤字で日本を復活させよ」と題して凡そ1万2千字の提言をされておられます。私なりに読ませて頂き、簡略して皆さんにご紹介をさせていただきました。

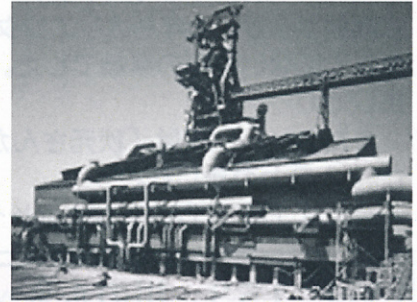
「景気とは常に一本調子でなく、山があれば谷があり、好況もピークを過ぎれば必ず不況が始まり、底を打てば再び好転すると言う必然的な繰り返しであり、私達が知る戦後も凡そ5年周期で行われました。そして、経済成長率3%を超えた部分はバブルでありました。今回の経済危機は、金融資本と産業資本の関係が本来、金融資本は産業活動を円滑にさせる潤滑油の役目ですが、いつの間にかその役目を超えてグローバル化、市場原理と言う名のもとに暴走して、企業をモノの如く右から左へと転売し、産業界に大混乱を起こし崩壊させ、当然として金融資本事態も自滅してしまったのであります。客観的に

見れば日本企業の財務内容は悪くないのです。

今「根拠なき悲観論」が日本全体に広がっておりますが、ここで大事なことは赤字決算できる企業は財務内容の良い企業であり、短期間で在庫整理を行って、財務状況が健全なうちに膿を出し切ってしまう余力があるからです。

かつてのバブル崩壊の「失われた15年」の時は日本には余力がなかったからであります。

日本は輸出大国だと言われ、確かに世界有数の貿易高を持っておりますが、輸出額はGDPの15%に過ぎません。中国は35%、EUは50%であります。



問題点として、日本は資源輸入国で石油等エネルギー凡そ20兆円、食糧6兆円を輸入に頼っております。

国民生活を支える為には最低26兆円稼がなければ日本民族の死活に係るからであります。

これからの日本は新しい農業振興を成功させてエネルギーや食糧を確保して輸入支出を減らして行く努力が絶対に必要であります。客観的に見れば日本企業の財務内容は悪くないのです。アメリカやヨーロッパが受けた傷に比べれば、日本の傷ははるかに浅いものです。悲観論はマスコミが煽り過ぎているからであります。

従って今はいかに早く在庫調整を済ませて次に来る景気に備えるかの体制、氣力を失わないことあります。

先日「新日鐵高炉休止、400万屯減産」と、あれは改修のための一時休止であります。

麻生政権は総額75兆円の積極的景気対策を打ち出しています。諸外国にはこれだけの大型対策はありません。

政府の対応の良かった事は、成果で明らかであります。

アメリカ型経営は、極端に株主の利益を優先しますので、短期利益型経営となって、経営者も落下傘で社外、異業種（弁護士が多い）から下ってきますが、日本の経営者の多くは従業員からであり、企業内で共に苦しさ、喜びを共有し、分かち合った経営者であります。

日本企業の多くはこうした危機を乗り越えるDNAが埋め込まれている事に自信を持って受け継いでいくべきであります。日本には創業から100年以上生き残っている企業が10万社あり、新日鐵もそのひとつであります。世界では200年以上残っている企業は7千社、そのうちの3千社は日本の企業だそうです。日本の企業文明の素晴らしさであります。』